

# 中国語の「堵」<sup>dǔ</sup>と「塞」<sup>sāi</sup>

黄麗華

## 1. はじめに

中国語の動詞「堵」(dǔ)、「塞」(sāi)は、いずれも、ほぼ日本語の「ふさぐ」に相当する意味で用いられる動詞である。また、両者を組み合わせた「堵塞」(ふさぐ、せきとめる、うめる(愛知大学編1987))という複合動詞もある。本稿では、この「堵」「塞」の意味特徴を考える。

なお、「堵」「塞」は、他動詞文((1))、自動詞文((2))のいずれにも用いられるが、本論では、主として他動詞文に用いられる「堵」「塞」の意味を見ることにする。

(1) 張三 堵／塞 老鼠洞。(張三は鼠穴をふさぐ)

(2) 老鼠洞 堵／塞 住了。(鼠穴がふさがった)

## 2. 辞書の記述

「堵」「塞」の意味について、中国社会科学院語言研究所編(1979)『現代漢語詞典』(以下『漢語』と略す)、愛知大学編(1987)『中日大辞典』(以下『中日』と略す)では、それぞれ次のように記述している。

堵： ① 堵塞(ふさぐ、せきとめる、うめる。『中日』“堵塞”の項訳)

② 悶(気がふさぐ。『中日』“悶”の項訳)

塞： 把東西放進有空隙的地方(隙間のあるところにもものを入れる。筆者訳)

——『漢語』

堵： ① 塞ぐ、防ぎとめる。

② 気がふさぐ、不愉快である、気がめいる。

塞： ① 塞ぐ。

② 栓をする。

③ つめる、押し込む。

——『中日』

『漢語』における「堵」の記述は単なる語の置き換えに過ぎず、「塞」の記述についても正確さに欠けている。『中日』における記述も、日本人に「堵」「塞」の意味を説明するには不十分である。

以下、用例をもとに「堵」「塞」の意味特徴を考える。

### 3. 対象と文型

#### 3.1. 対象

「堵」の対象には二つの種類がある。ひとつは「空間」((3))であり、もうひとつは「一定の流れを持つ(と想定される)もの」((4))である。

(3) 堵牆洞。(壁の穴をふさぐ)

(4) 用身体堵住激流。(体で激流をとめる)

一方、「塞」の対象は、「空間」((5))または「空間に入れられるもの」((7))である。

(5) 塞牆洞。(壁の穴をふさぐ)

(6)<sup>×</sup>塞住激流。

(7) 往書包里塞書。(カバンに本をつめる)

#### 3.2. 文型

「堵」と「塞」の基本文型を以下に示す。(NP<sub>1</sub>は主体、NP<sub>2</sub>は対象)

(8) NP<sub>1</sub> 堵 NP<sub>2</sub>

(9) NP<sub>1</sub> 塞 NP<sub>2</sub>

(8)の文型においては、NP<sub>2</sub>は「空間」((10))、または「一定の流れを持つ(と想定される)もの」((11))のいずれもとることができる。(9)の文型においては、NP<sub>2</sub>は「空間」((12))しかとらず、「空間に入れられるもの」((13))をとることができない。

(10) 張三堵老鼠洞。(張三は鼠穴をふさぐ)

(11) 張三堵住了激流。(張三は激流をとめた)

(12) 張三塞老鼠洞。(張三は鼠穴をふさぐ)

(13)<sup>×</sup>張三塞書。(張三は本をつめる)

「堵」「塞」はともに「把字句」をとることができる<sup>(注1)</sup>。ただし、「把字句」の場合、動詞の後に必ず「定着」を表す「上」「住」のような「補語」または「完了」を表す「了」が必要である<sup>(注2)</sup>。

(14) NP<sub>1</sub> 把 NP<sub>2</sub> 堵上/堵住

(15) NP<sub>1</sub> 把 NP<sub>2</sub> 塞上/堵住

(14)の文型においては、NP<sub>2</sub>は「空間」または「一定の流れを持つ(と想定される)もの」であり、(15)の文型においては、NP<sub>2</sub>は「空間」のみであり、「入れられるもの」であってはならない。

(16) 你把老鼠洞 堵上/堵住。(鼠穴をふさぎなさい)

(17) 張三把激流堵住了。(張三は激流をとめた)

(18) 你把老鼠洞 塞上／塞住。(鼠穴をふさぎなさい)

(19)<sup>×</sup> 張三把書 塞上／塞住。(張三は本をつめる)

「把字句」をとる場合、「塞」は「移動」「到達」を表わす補語「進」「到」とも共起するが、「堵」は共起しない(NP<sub>3</sub>は対象の到達点を示す)。この場合、対象は「入れられるもの」である。

(20)<sup>×</sup> NP<sub>1</sub> 把 NP<sub>2</sub> 堵進／堵到 NP<sub>3</sub>

(21) NP<sub>1</sub> 把 NP<sub>2</sub> 塞進／塞到 NP<sub>3</sub>

(22)<sup>×</sup> 張三把書 堵進／堵到 書包里。

(23) 張三把書 塞進／塞到 書包里。(張三はカバンに本をつめる)

また、「塞」は対象の移動先を表す介詞句「往～」と共起するが、「堵」は共起しない<sup>(注3)</sup>。この場合も、対象は「入れられるもの」である。

(24)<sup>×</sup> NP<sub>1</sub> 往 NP<sub>3</sub> 堵 NP<sub>2</sub>

(25) NP<sub>1</sub> 往 NP<sub>3</sub> 塞 NP<sub>2</sub>

(26)<sup>×</sup> 張三往書包里堵書。

(27) 張三往書包里塞書。(張三はカバンに本をつめる)

この点については、6.でもう一度触れる。

以下では、まず「空間をふさぐ」動作を表す「堵」と「塞」の意味の違いを考える。

#### 4. 「空間」を対象とする「堵」と「塞」

##### 4.1. 「空間」の性質

「空間をふさぐ」動作を表す「堵」と「塞」が対象とするのは、「穴」「隙間」(以下、一括して「穴」と呼ぶ)として捉えられているものである。

ただし、「堵」と「塞」とでは、対象とする「穴」の性質が異なる。ここでいう「穴」の性質の違いとは、「三次元的な「穴」(すなわち「一定の奥行きのある「穴」)」と「二次元的な「穴」(すなわち「奥行きのない「穴」)」との違いである<sup>(注4)</sup>。

(28) 堵牆洞。(壁の穴をふさぐ)

(29) 塞牆洞。(壁の穴をふさぐ)

(30) 堵耳朵。(耳をふさぐ)

(31) 塞耳朵。(耳をふさぐ)

(32) 堵嘴。(口をふさぐ)

(33) 塞嘴。(口をふさぐ)

(34) 堵門縫。(戸の隙間をふさぐ)

(35) 塞門縫。(戸の隙間をふさぐ)

(28)~(35)の「墻洞」(壁の穴)、「耳朶」(耳の穴)、「嘴」(口)、「門縫」(ドアの隙間)は、いずれも「三次元的な『穴』」として捉えることができる。そのような場合、「堵」「塞」のいずれも適格である。

しかし、次の例では「塞」は不適格である。

(36) 堵窓戸紙上的窟窿。(障子紙の穴をふさぐ)

(37)<sup>×</sup> 塞窓戸紙上的窟窿。

(38) 堵玻璃上的洞。(ガラスの穴をふさぐ)

(39)<sup>×</sup> 塞玻璃上的洞。

(40) 堵窓簾上的洞。(カーテンの穴をふさぐ)

(41)<sup>×</sup> 塞窓簾上的洞。

(42) 堵住眼。(目をふさぐ)

(43)<sup>×</sup> 塞住眼。

(36)~(43)の「窓戸紙的窟窿」(障子紙の穴)、「玻璃上的洞」(ガラスの穴)、「窓簾上的洞」(カーテンの穴)、「眼」(目)は、「壁の穴」「耳の穴」「口」「ドアの隙間」とは異なり、「三次元的な『穴』」として捉えることができない。

つまり、「塞」は「三次元的な『穴』」のみを対象とするのに対し、「堵」は『穴』に対する制限がなく、「三次元的な『穴』」も「二次元的な『穴』」も対象とすることができる。

さらに、「塞」は『穴』の大きさについても制限がある。

(44)<sup>×</sup> 塞堤坝的决口。(堤防の決壊した箇所をふさぐ)

(45)<sup>×</sup> 塞山洞。(洞穴をふさぐ)

(46) 塞墙洞。(壁の穴をふさぐ)

(47) 塞老鼠洞。(鼠の穴をふさぐ)

「堤防の決壊した箇所」「洞穴」と「壁の穴」「鼠の穴」の違いは「『穴』の大きさ」と考えられる。「塞」は「大きい『穴』」を対象とせず、「小さい『穴』」のみを対象とするのである。

一方、「堵」には『穴』の大きさに関する制限はない。

(48) 堵堤坝的决口。(堤防の決壊した箇所をふさぐ)

(49) 堵山洞。(洞穴をふさぐ)

(50) 堵墙洞。(壁の穴をふさぐ)

(51) 堵老鼠洞。(鼠の穴をふさぐ)

以上、「堵」は対象となるものが「穴」であればよいのに対し、「塞」は「三次元的な『穴』、しかも「小さい『穴』」しか対象にしないことについて述べた。

#### 4.2. 「穴」のふさぎ方

4.1.で「堵」と「塞」はともに「三次元的な『穴』」を対象にすることができることを見た。しかし、両者の表わす意味には違いがある。

(52) 堵住槍口。(銃口をふさぐ)

(53) 塞住槍口。(銃口をふさぐ)

(54) 堵住耳朵。(耳をふさぐ)

(55) 塞住耳朵。(耳をふさぐ)

(56) 堵住嘴。(口をふさぐ)

(57) 塞住嘴。(口をふさぐ)

「堵」を用いた(52)(54)(56)は、「弾が出ないように何かを銃口にあててふさぐ」「音が耳に入らないように何かを耳にあててふさぐ」「声が出ないように口に何かをあててふさぐ」ことを表す。一方、「塞」を用いた(53)(55)(57)は「銃口に何かをつめてふさぐ」「耳栓などのようなものを耳に差し込んでふさぐ」「口に何かをつめてふさぐ」という意味である。

つまり、「堵」は「何かを置くことによって、『穴』をふさぐ」こと、すなわち「何かの障害物において、通路を遮断する」ことを表し、「塞」は「『穴』に何かをつめてふさぐ」ことを表すと考えられる。

この違いは次の文では明確に現れる。

(58) 用身体堵住槍口。(銃口に体をあててふさぐ)

(59)<sup>×</sup> 用身体塞住槍口。

(60) 四指并拢堵住耳朵。(揃えた四本の指をあてて耳をふさぐ)

(61)<sup>×</sup> 四指并拢塞住耳朵。

(62) 用手掌堵住他的嘴。(手のひらをあてて彼の口をふさぐ)

(63)<sup>×</sup> 用手掌塞住他的嘴。

「体」「揃えた四本の指」「手のひら」は、「銃口」「耳」「口」に「あてる」ことはできるが、「つめる」ことはできない。よって、「堵」は適格で、「塞」は不適格なのである。

4.1.で述べたように、「塞」は「二次元的な『穴』」を対象にとることができない。

(64)<sup>×</sup> 塞窓戶紙上的窟窿。=(37)

(65)<sup>×</sup> 塞玻璃上的洞。=(39)

(66)<sup>×</sup> 塞窓簾的洞。=(41)

(67)<sup>×</sup> 塞住眼。=(43)

これも、「障子紙の穴」「ガラスの穴」「カーテンの穴」「目」に、「モノをつめる」ことができないために、「塞」が不適格になるのである。

「堵」は、「弾」「音」「声」といったような「流れをもったもの」の遮断を目的とする動作である。遮断するために用いられる「障害物」は「『穴』の入口」に置かれるだけでよい。

一方、「塞」は、「通路の遮断」を目的とする動作ではなく、「三次元的な『穴』」に何かをつめる、差し込む」動作である。その結果として「『穴』がふさがる」「通路が遮断される」場合もあるが、それは「塞」の基本的な意味ではない。

#### 4.3. 「出入口」「通路」の遮断

4.2. で見たように、「堵」は「『穴』に障害物をおいて、通路を遮断する」ことを表す。その場合、「堵」の対象となる『穴』は、「門」のような「出入口」であることもある。「出入口」も「二次元的な『穴』」として捉えることができよう。

(68) 大汽車堵着門、過不去。(門を大型車がふさいでいて、通れない)

さらに、「堵」の対象は、単なる「通路」であってもよい。

(69) 你別堵着路。(君、道をふさぐな)

これも、「堵」が基本的に「流れを遮断する」ことを表すからであろう。

一方、「塞」は「『穴』に何かをつめる」ことを表すため、「塞」の対象は「モノをつめる」ことができる「三次元的な『穴』」でなければならない。よって、「出入口」「通路」を対象にすることはできない。

(70)<sup>×</sup> 大汽車塞着門、過不去。(cf. (68))

(71)<sup>×</sup> 你別塞着路。(cf. (69))

#### 5. 「空間」以外を対象とする「堵」と「塞」

3.1. で、「堵」が「一定の流れを持つ(と想定される)もの」を対象にとることができることを見た。

(72) 堵住激流。(激流をとめる)

(73) 把狼堵在洞里。(狼を洞穴に閉じ込める)

(72)は「通路に障害物をおいて、激流を遮断する」ことであり、(73)は「狼が出てくる

(行き来する)のを遮断する」ことである。これも、「堵」が「通路をふさいで、流れをとめる」という意味を持つからである。

(74) 要堅決堵住走後門這種不正之風。(裏口商売の悪い風潮をかたくせきとめよう)

(74)は比喩的な表現である。「風潮」も、一定の方向性を持った「流れ」を持つものである。よって、「堵」を用いて表すことができるのである。

ちなみに、「堵」は「気がふさぐ」「不愉快である」ことを表すこともある(2.参照)が、これも「鬱積した気持ちの発散が遮断されて、気がふさぐ(不愉快になる)」ということであろう。

一方、「塞」は「三次元的な『穴』につめられるモノ」を対象とすることができるが、それもやはり「塞」の「モノをつめる」という基本的な意味から来るものである。

(75) 把書塞到書包里。(カバンに本をつめる)

(76) 往書包里塞書。(カバンに本をつめる)

(77) 把書塞到書架里。(本棚に本をつめこむ)

(78) 往書架里塞書。(本棚に本をつめこむ)

(79) 把衣服塞到皮箱里。(トランクに服をつめる)

(80) 往皮箱里塞衣服。(トランクに服をつめる)

ただし、この場合、「三次元的な『穴』」は、「モノをつめる」ことができるような「狭い『穴』」でなければならない。

(81)<sup>×</sup> 把書塞到空蕩蕩的書包里。(cf. 何も入っていないカバンに本をつめる)

(82)<sup>×</sup> 往空蕩蕩的書包里塞書。(cf.(81))

(83)<sup>×</sup> 把書塞到空蕩蕩的書架里。(cf. 何も入っていない本棚に本をつめる)

(84)<sup>×</sup> 往空蕩蕩的書架里塞書。(cf.(83))

(85)<sup>×</sup> 把衣服塞到空蕩蕩的皮箱里。(cf. 何も入っていないトランクに服をつめる)

(86)<sup>×</sup> 往空蕩蕩的皮箱里塞衣服。(cf.(85))

(81)~(86)が不適格なのは、「空蕩蕩的空間」(何も入っていないゆったりとした『穴』)は、「モノをつめる」には「広すぎる」からである。4.1.で「塞堤坝的決口(堤防の決壊した箇所)」「塞山洞(洞穴)」が不適格であることを見たが、これも同じ理由による。

## 6. 補語との関係

「塞」は「狭い空間に何かをつめる」ことを表す。つまり、基本的には「対象を入

れる」ことである。3.2.で述べたように、「塞」は「定着」を表す補語「上」「住」と共起する一方で、「移動」を表す補語「進」「到」、対象の移動先を表す介詞句「往～」とも共起する。それも「塞」が「対象を入れる」、すなわち「対象を移動、定位させる」ことを表すからである。「上」「住」と共起する場合は「定位」に、「進」「到」と共起する場合は「移動」に重点が置かれるわけである。

一方、「堵」は、「定着」を表わす補語「住」「上」と共起するが、「進」「到」とは共起しない。これも「堵」が「通路に障害物をおいて流れを遮断する」というように、「動きがとまった状態をつくりだす」ことを表すからである。

## 7. まとめ

以上の考察を以下のようにまとめる。

堵：通路に障害物をおいて流れを遮断する。

塞：比較的狭い空間にモノをつめこむ。

これまでの辞書の記述では、「堵」と「塞」にはともに「ふさぐ」という訳語があらわれている（2.参照）。しかし、本論の考察で分かるように、「堵」「塞」の表す意味はまったく異なる。「堵」は、「通路に障害物をおいて、流れを遮断する」という抽象度の高い動詞であり、一方、「塞」は、「三次元的な『穴』にモノをつめこむ」という、より具体的な動作を表す動詞である。

### （注）

1. 「把字句」は「処置式」とも呼ばれ、「把」の後に置かれる対象を処置したり、影響を与えることを意味する。
2. 本稿で「補語」と呼ぶのは、中国語文法でいう「結果補語」「方向補語」である。つまり動詞の後について動作の方向または動作によってもたらされた結果を表すものである。
3. 補語「進」を伴った形「塞進」は、起点を表す介詞句「從～」と共起して、「～から～を差し込む」動作を表すことがある。この場合「塞到」を用いることはできない。よって、このような場合の「塞進」は別に考えるべきであろう。

例：張三從門縫里塞進（×塞到）一本書。（張三は戸の隙間から本を一冊差し込んだ）

4. ただし、「三次元的な『穴』」の場合、『穴』が「貫通」しているかどうかは問題にならない。

／参考文献／

中国社会科学院語言研究所（1979）『現代漢語詞典』商務印書館

愛知大学編（1987）『中日大辞典増訂第二版』大修館書店

森田良行（1977）『基礎日本語1』角川書店

孟 琮他編（1987）『動詞用法辞典』上海辞書出版社

言語経歴	1957年12月	中国浙江省蒼南県生まれ
	0歳～3歳	蒼南県
	3歳～20歳	中国山西省太谷県
	20歳～25歳	中国陝西省西安市
	25歳～26歳	中国北京市
	26歳～27歳	西安市
	27歳～28歳	日本群馬県藤岡市
	28歳～30歳	日本東京都（港区・文京区）

（Huang Lihua・東京都立大学大学院学生）